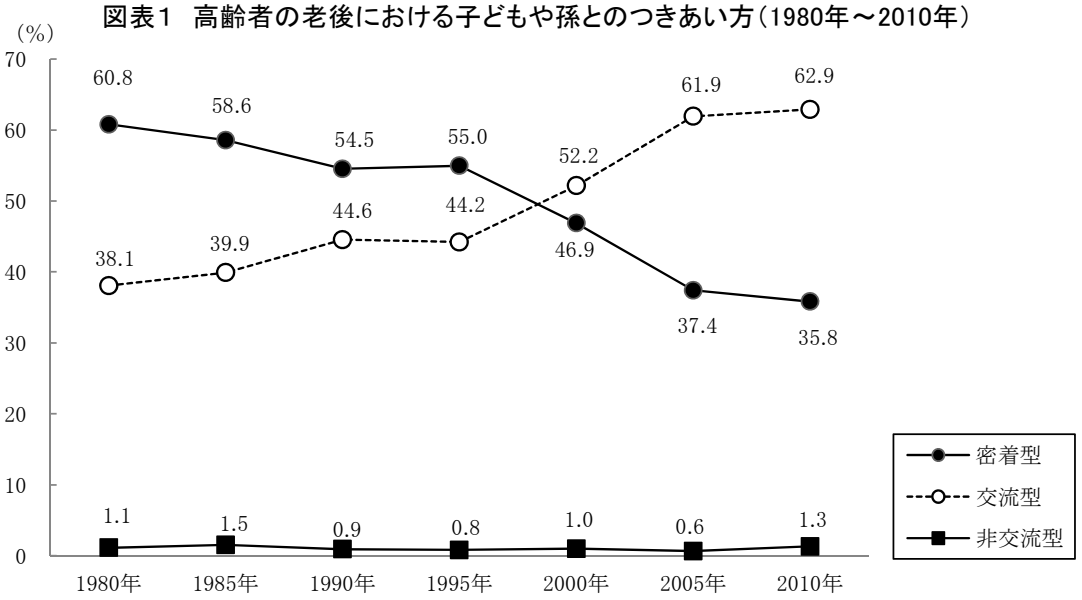
祖父母による育児支援の行方

主任研究員 北村 安樹子

＜2000年は日本の祖父母・孫関係の転換点＞

内閣府の調査によると、老後における子どもや孫とのつき合い方についてのわが国の高齢者の意識は、2000年を境に大きく変化したことがみてとれる。図表１のように、それ以前は「子どもや孫とは、いつも一緒に生活できるのがよい」とする『密着型』の関係を支持する人が最も多かったが、2000年以降は「子どもや孫とは、ときどき会って食事や会話をするのがよい」あるいは「子どもや孫とはたまに会話をする程度でよい」とする『交流型』の関係を支持する人がこの割合を上回るようになったからだ。大げさにいえば、わが国の高齢者における子どもや孫とのつきあい方をめぐる価値観は、この年を境にして21世紀型の新しいフェーズを迎えたといえる。

図表１　高齢者の老後における子どもや孫とのつきあい方（1980年～2010年）



注　：調査対象者は60歳以上男女。『密着型』は「子どもや孫とは、いつも一緒に生活できるのがよい」、『交流型』は「子どもや孫とは、ときどき会って食事や会話をするのがよい」「子どもや孫とは、たまに会話をする程度でよい」の合計割合、『非交流型』は「子どもや孫とは、全くつき合わずに生活するのがよい」。なお、図表の数値は「わからない」と無回答を除いた再集計値

資料：内閣府『第7回高齢者の生活に関する国際比較調査』より筆者作成

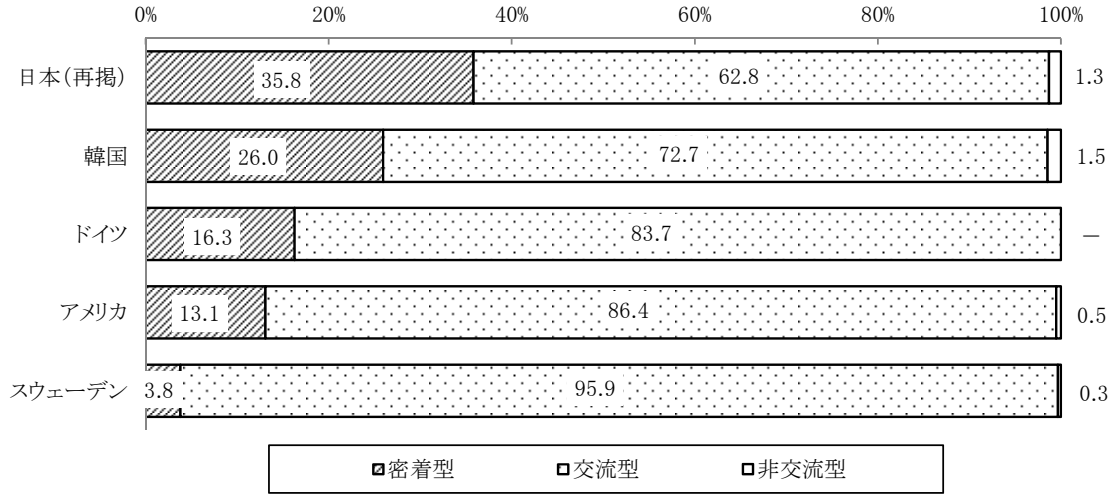
なお、調査開始以来、「子どもや孫とは、全くつき合わずに生活するのがよい」とする『非交流型』の支持率は一貫して低い。また、『交流型』の内訳においても、「子

（ホームページの掲載は2014年7月）

どもや孫とは、ときどき会って食事や会話をするのがよい」という人が「子どもや孫とはたまに会話をする程度でよい」とする人を大きく上回っている。つまり、祖父母と孫のつきあい方に対する考え方は、『密着型』から『交流型』に大きく変化してきたが、交流そのものを忌避する傾向が強まったというわけではないと考えられる。

ちなみに、スウェーデンやアメリカ、ドイツなどの欧米諸国ではこのような『交流型』の関係をのぞましいと考える高齢者が８割超を占めており、わが国（62.8%）を大幅に上回っている（図表２）。こうした価値観をもつ高齢者は、隣国の韓国でも７割を上回り、日本より10ポイント近く高い。これらの国々と比較した場合、日本はむしろ、『密着型』の割合が高い部類に入るという見方もできる。

図表２　高齢者の老後における子どもや孫とのつきあい方(国際比較、2010年)



注・資料は図表1に同じ

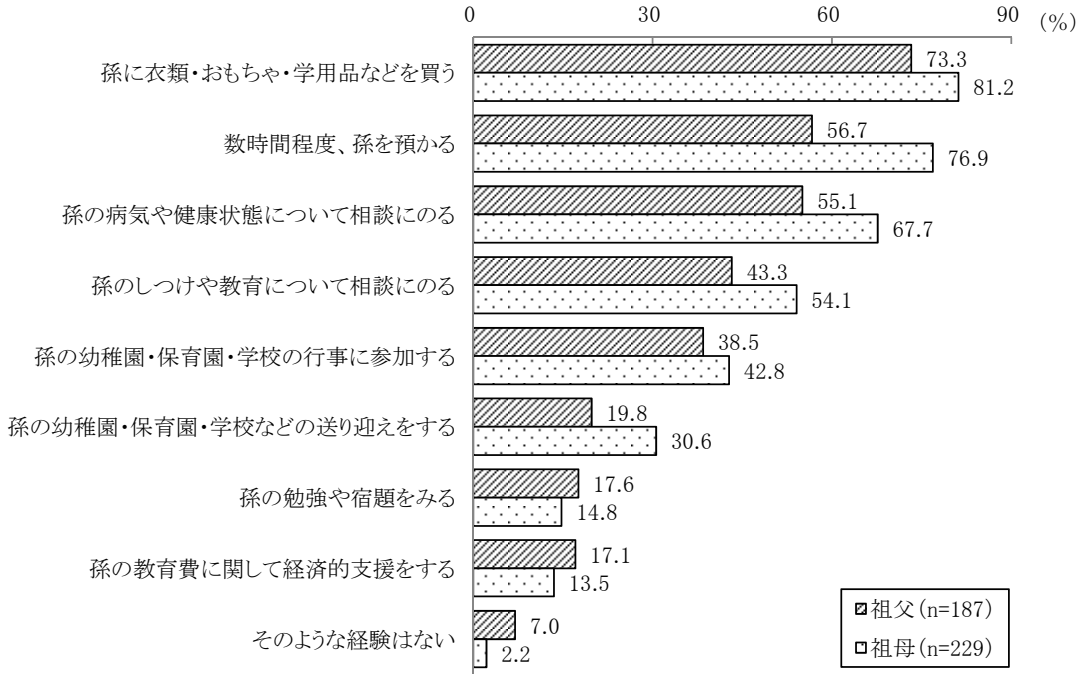
＜三世代の交流と祖父母の育児支援＞

祖父母と子どもや孫との交流にはさまざまな意味合いが考えられるが、その一つに祖父母による子世代の育児支援があげられる。当研究所が行った調査でも、子夫婦の双方が労働時間の長い共働きである場合や、子夫婦の夫が長時間労働や単身赴任等で妻の育児負担が大きい場合、あるいは子どもがひとり親である場合などには、祖父母に家事や育児を頼ることで、子世帯が生活コストを下げたり、ワーク・ライフ・バランスをはかっているケースが少なくないことが明らかになっている（北村 2008)。

この調査では孫がいる男女が経験した育児支援についてたずねているが、経験者が最も多かったのは「孫に衣類・おもちゃ・学用品などを買う」(祖父：73.3%、祖母：81.2%）という経済的支援であった（図表３)。ただし、「数時間程度、孫を預かる」（祖父：56.7%、祖母：76.9%）という物理的な支援や、「孫の病気や健康状態について相談にのる」(祖父：55.1%、祖母：67.7%）や「孫のしつけや教育について相談に

のる」（祖父：43.3％、祖母：54.1％）といった精神的な側面での支援もこれに続いていた。「数時間程度、孫を預かる」のような物理的支援が行われるためには、祖父母と子どもや孫がある程度近い範囲に居住している必要があるが、祖父母による孫育ての支援は、居住距離に制約を受けない経済的・精神的な側面にも及んでいる。孫の育児をめぐって、祖父母が多様な役割を担っていることが改めて確認できる。

図表3　祖父母における孫の育児支援経験＜複数回答＞



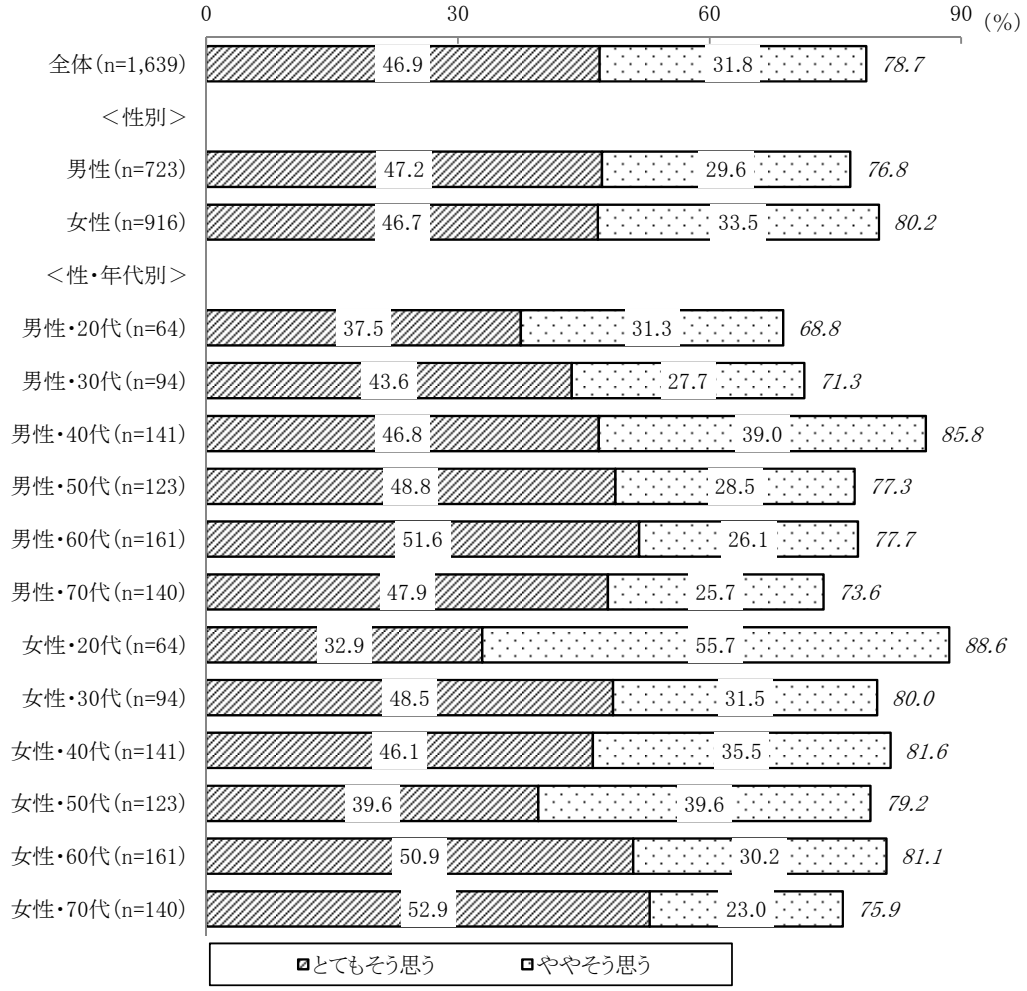
注　:回答者は全国の50～79歳の孫がいる男女416名
資料:北村安樹子(2008)『子育て世代のワーク・ライフ・バランスと“祖父母力“』第一生命経済研究所

＜祖父母による育児支援への評価＞

では、祖父母による子世代の育児支援を、人々はどのように評価しているのか。

昨年、内閣府が全国の20～79歳の男女3,000名を対象に行った全国調査には、この点についてたずねた興味深い設問がある。この調査によると、「子どもが小学校に入学するまでの間、子どもからみた祖父母が育児や家事の手助けをすることは望ましいと思いますか」という問いに対して、望ましいと思うと答えた人（「とてもそう思う」＋「ややそう思う」の合計割合）が男女とも８割前後を占める（図表４）。性・年代別にみた場合にも、多少のばらつきはみられるものの、望ましいと思うと答えた人はおおむね７割弱から８割強を占める。この結果からは、幼い子どもがいる子夫婦が祖父母から家事・育児の支援を得ることを望ましいと考える人の方が、望ましくないと考える人を大きく上回っていることがわかる。

図表4　子どもが小学校に入学するまでの間、祖父母が育児や家事の手助けをすることは望ましいと思うか（性別、性・年代別）



注　：調査対象者は全国の20～79歳の男女3,000名。調査時期は2013年10月。斜体は「とてもそう思う」「ややそう思う」の合計
資料：内閣府『家族と地域における子育てに関する意識調査』2014年

＜祖父母による育児支援の行方＞

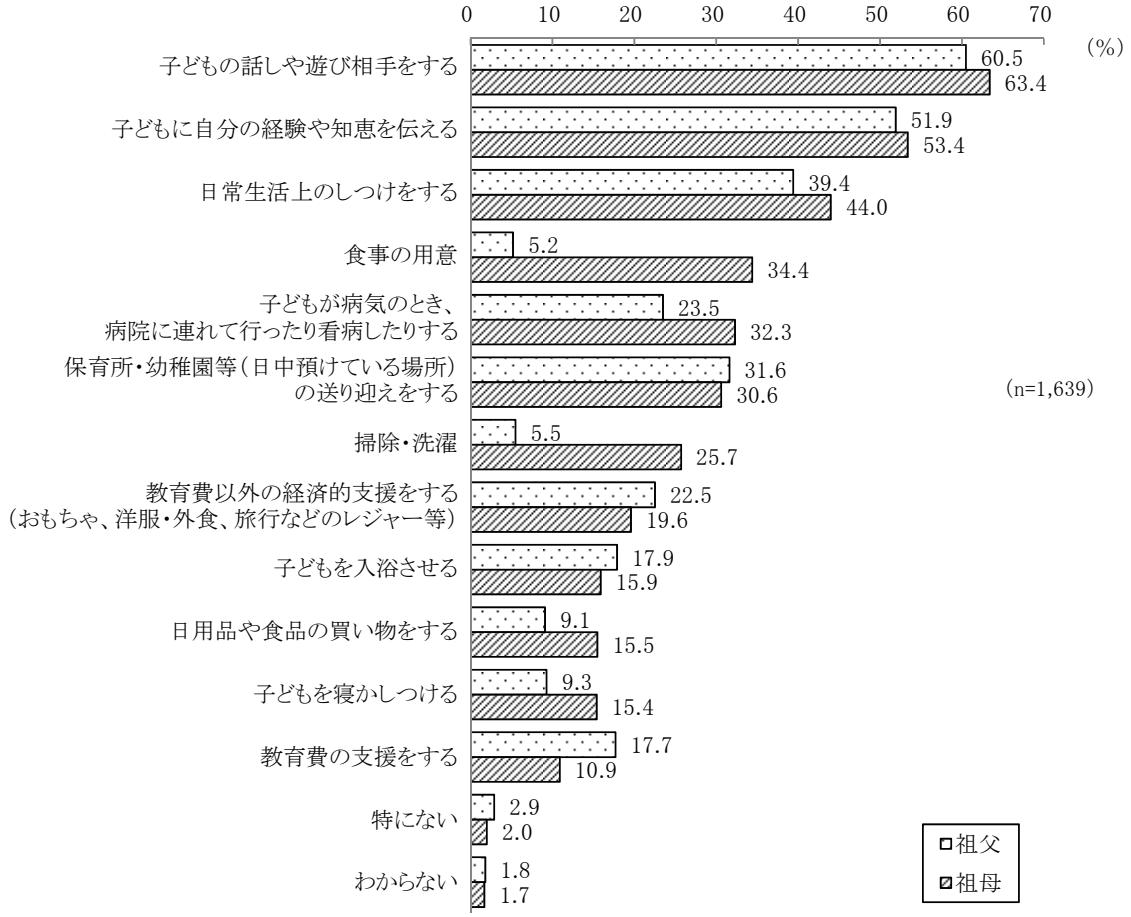
では、これほど多くの人が祖父母による家事・育児の支援を望ましいと思うのはなぜなのだろうか。

先の内閣府の調査では、人々が祖父母に具体的にどのような手助けをしたらよいと考えているのかについてもたずねている。この結果をみると、最も多くあげられているのは「子どもの話しや遊び相手をする」（祖父：60.5%、祖母：63.4%）であり、「子どもに自分の経験や知恵を伝える」（祖父：51.9%、祖母：53.4%）がこれに続いている（図表５）。

人々が望ましいと考える祖父母の手助けは、家事・育児をめぐる物理的な支援や経済的支援よりも、祖父母が子どもの話相手や遊び相手となってさまざまな経験や知恵を伝えるという、孫の教育の面での支援が上回っている。

筆者が行った先の調査では、孫がいる男女の９割以上が「孫がいることに、はりあいや生きがいを感じる」と答えていた（北村 2008）。しかし、祖父母の中には必ずしも子世代の家事や育児を支援してやれる時間的ゆとりを十分にもたない人も多いだろう。子世代にとっても、祖父母以外にも家事・育児の支援を頼れる選択肢が増えれば、物理的な側面に関して祖父母の支援を得ることの重要性は低下していく可能性がある。一方で、孫世代が自分や親とは異なる時代を生きた豊かな人生経験をもつ祖父母から、遊びや会話を通じてさまざまな経験や知恵を学ぶことへの期待は高まっていくのではないだろうか。

図表５　一般的に、子どもが小学校に入学するまでの間、祖父母は家事・育児に関してどのような手助けをしたらよいと思うか＜複数回答＞



資料：図表4に同じ。「その他」は省略

（研究開発室　きたむら　あきこ）